

---

# 髪が白く染まる頃

泡沫

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

髪が白く染まる頃

### 【Nコード】

N9875X

### 【作者名】

泡沫

### 【あらすじ】

最近俺の前髪に白髪が増え始めた。これは染めるしかない、と決断したら前髪が完璧に白に染まっていた。そんなことに戸惑う暇もなく前髪に現れた居候！ クラスに現れた男の娘！ 挙げ句の果てに異世界からの刺客！？ 俺の日常を帰してくれ！  
こんなあらすじで割と異能バトルファンタジー。…ファンタジー？

## ・髪、体験

暗い闇の中。俺は確かにそこに存在している。ただ、体あるとか  
そういつた概念がこの空間では消失しているかに思えた。

『いたい…たすけて…』

どこからか響く助けを求める声。それはたしかに悲鳴であって、  
何故か聞いていてどことなく心地良い響きを併せていた。

その声の持ち主が少女であることは声を聞かなくとも分かってい  
た。それというのもそこに存在しているのは感じ取れたから。

少女は繰り返し返す。何度も何度も 悲痛の歌を。

俺から声をかける。しかし少女はそれに気付かないのか、悲痛の  
歌を歌い続ける。

透き通った声を聞く度に俺は苦しくなる。何も出来ないという無  
力感だけが俺を包んでいく。

歌はまだ 続いている

✦ ✦ ✦

「なに？また同じ夢見てたの？」

「まあな。授業中に寝るとよく見るんだが…なにか関係あるのか？  
クラスの誰かが助けを求めているとか」

そう、さっきのは全て夢。暗い闇の中にはいないし、体もはつき  
り存在してる。至って健康だ。ただ1つあるとするなら…

「誰が求めるのよ？それにしても…大分増えてきたね。白髪」

「ああ、もうじいさんみたいになっちゃった」

というのも最近になって何故か前髪オンリーで白髪が進行してい  
る。おかげで生徒指導に捕まるハメになった。全く、毎日数本ずつ  
律儀に染めるアホが世の中にいるのか？脳みそ筋肉か？

「ほらほら、悩んでるとまた増えてくよ」

「それもそうか、って気にしないほうが難しいんだけどな」

季節は高校2年の春。新しい出会いが始まるうとしていた。それは俺がとんでもなく面倒で不可解なことに巻き込まれていくことでもあったのだが：まあ、知る由もない。

城野 初はつの。それが俺。特筆することもないことが特徴：というほどに何も無いわけでもない。言うなれば女性：いや、普段接するのはどちらかといえば女子だろうか。いや、この際幼女でも変わらな idarou。女メ という生き物が苦手だ。なんと言えばいいだろうか。会話をすれば、イエスカノー。名前を呼ばればごめんなさい。男女ペアなんか作られるような日にはトイレに避難。

他人から見れば過剰反応しすぎなんだろうが、俺にとつてはポテチのうすしおかコンソメかくらいのことなんだ。いや、もしかしたらのりしおかもしれない。そういうことじゃなく、とにかく自分の首を絞める思いなんだ。

俺の中で、女メ という生き物は未確認生物に等しい。むしろ確認されて近くににいる分、チュパブラやスカイフィッシュの類より質が悪い。

あいつらは腹の底で何を考えてるのか分からない。というのもあれは中学3年の冬。受験シーズン真っ只中のことだ。あの頃の俺は今みたいに女子に怯えることもなく当たり前のように過ごしていた。ただある日を境に変わった。

あれは雪の日だっただろうか。俺はある女子に告白された。よくある話だ。放課後の教室に2人きり。そんなシチュエーション。受験は確かに忙しかったけど、そんなのは気にせず俺は良い返事を返した。

これもまたよくある話だ。俺は罰ゲームの「ダシ」にされてただけだった。その後笑いながら教室に入ってくる女子達。ただそれだけ。噂には聞いていた。ああ、これかと妙に納得してる自分が居た。確かに居た。その反面で絶望の淵に立っている自分が居た。

気付けば涙を流して足元から崩れていた。多分頭の中がパニック

になっていた。パニックになっていたのだからよくは覚えていないが。

記憶がハッキリしてる頃には幼なじみの女子が教室の女子を追い出していた。慰めてくれてたのは幼なじみの里紙さとがみ 理央りお。

気を使って話しかけてくれるその幼なじみ。ただ、女子が怖かった。近くにいるだけで嫌だった。あるうことか俺は理央を突き飛ばしていた。どうしていいか分からなくなってまた涙を流しだした。

それでも理央は笑いながら手を差し伸ばしてくれた。

このことがあってからは心を許せる`女`は理央だけになっていた。

特筆すべき特徴があるなら俺にはこれしかないと思う。

このままじゃ行く先は理央と結婚か一生独身と考えるとなんとかしないといけないと思う自分とそれでもいいんじゃないかと思う自分。結局の所は現状維持。正直クラスの男子連中だけでつるんでるだけでも毎日楽しい。とりあえずはそれで良かった。

「ったく…もし変えられるなら誰か変えてくれ」

「いきなりどつたの？」

「いや、独り言」

頼みこんで戻して欲しいと思うほどではなかった気がするんだがな…。

✦ ✦ ✦

学校が終われば帰宅。それが帰宅部のポリシー、というか必然である。極力女子との接触を避けたかった為高校は家から最寄りの場所。徒歩20分。走れば15分といったところか。ただ、多少…いや少はいらないな。多なりとも偏差値が足りなかったこともあってか猛勉強をしてギリギリ入学。おかげで毎日の勉強はてんでこ舞いだ。

まあ、その努力の甲斐あってか、再び幼なじみと同じ学校に通えて、一緒に下校出来るわけだ。

「ていうか、理央。今日は部活はなかったのかよ？」

「今日は全部の部活が休みなんだけど」

「なんだって…」

今日は帰宅部以外も学校が終われば帰宅しなければならぬらしい。俺のポリシーがいつの間にかみんなのポリシーに。これぞワンフォアオール、オールフォアワンの精神なのか。

「そうだ、今日は暇だったりする？そろそろ髪の毛を切りたくない？」

「あ、いや…」

この幼なじみに特筆すべき特徴があるならば、それは理容店の娘ということだろう。ただ、今まで切ってもらったの経験を言わせてもらうならその特徴はとりあえず短所の欄に書くべきだ。

ハサミだけなのに何故か坊主になったり、前髪が斜めになってしまったのを直したら逆に斜めになって、仕舞いには前髪がなくなることもあった。

「なによ。嫌そうな顔しないでよ。最近はお客さんも切る程に成長したんだから！」

「それはなんだ？ 犠牲者が増えたってことか？」

「そりゃ、多少は…ってそれはいいの！」

よくねーだろ。心の底でツッコミをいれる。

「あ、それなら白髪染めとか出来るか？」

「それくらい余裕よ！ いいわ、あなたの髪も心まで染めあげてやる！」

お前はどんな白髪染めを使う気だ？ 個人としては危ない薬を使うのだけは勘弁願いたい。

「そうと決まったら早速家まで行くわよ。普通の白髪染めでいいわよね？」

「ああ…」

普通の白髪染め、と言われて少し安心した。安心したが…普通じゃないのがあるのかよ。むしろ幼なじみに対する不安要素が増えた。

とまあ、里紙理容店の座り慣れた椅子に座りこみ、今は染めあがるまでの時間を待つてる最中。ここまでの過程を省かせてもらったのはなんとか察して聞かないで欲しいレベルの出来事だったので自重する。

「なあ、そろそろいいんじゃないか？」

「そうね。髪洗っていいわよ」

「自分でやるのか？」

「もちろん。もう二度と染め粉は触らないことにしたの」

それでいいのか、理容店の娘。

俺は少々自分で髪を洗っていく。黒い水がどんどん流れていく。まるで元の色が抜けていくかのように。だんだんと水は本来の色を取り戻し、髪を洗う手を止める。理央に渡されたタオルで垂れる水を受け止めながら頭をあげる。

「な、な、な、なんじゃこりゃー！」

となりで理央が笑っている。だが、笑いごとではない。

俺の前髪が完全に白に染まっていた。

「な、なあ、理央。変な薬は使ってないよな？」

「ぶふっ、う、うん。普通のやつを…ぶふふっ」

状況を整理しろ。白髪染めを行う。そして白髪増殖（前髪オンリー）。これ以上の状況確認が期待出来ない。

「あ、あんた前髪呪われてるんじゃない？」

「地味に嫌な呪いだな。どこのどいつがかけたのか気になって仕方ねえよ！」

半ばやけくそ気味である。

「と、とりあえず今日はひとまず帰ったら？ また調べておくから」

「本当に…頼んだ…ぞ」

1つの溜め息と心からの願いを残して俺は里紙理容店を後にした。しっかしなあ…どうしたもんかねえ…」

どんどん増えていく白髪。今に至っては前髪が全て白。どこの前衛的な不良かとツッコミをいれるには鏡の前の自分は元気には見え

ない。

「いつそのこと全部切っちゃうか……？」

ハサミに手をかける。そうだ。全部切ってしまうえば問題ないんだよ。

ハサミはその2つの切っ先をゆっくり開いていく。まるで中世のギロチンを彷彿とさせる。

そしてそのギロチンの刃は一気に下ろされる。

『ストップ！ ストップ、ストップ、ストップ！』

「……………は？」

確かに聞こえた声。しかし、周りに人の気配はない。そこであることに気付いた。

どこかで聞いたことがある声。それは夢の中で聞いたそれと同じだった。

「おい、どこにいる！」

『私はここですよ！ ほらほらここ、ここ』

声は頭に直接響いているようだったが分かる。それは前髪から聞こえていた。

「……………えか……………」

『え、なんて？』

「お前の仕業か！ この奇抜な髪型はお前の所行かと聞いてんだよ  
こんちくしょう！」

『えーっと……てへっ？』

「許されるか！」

『嬉しいくせにー』

「お前は俺の何を知ってるんだ！？」

『全て。あの日胸にしまった想いから、今日のこの時に芽生えた新しい想いまでだよ』

「確かに芽生えたよ。どうしようもない殺意が沸々と湧き上がってんだよ！」

『まあまあ、落ち着いて』

「うるせえ！　こんな前髪切つてやる！」

『あつ！　駄目！』

ハサミの刃を力任せに閉じる。

この時小気味よいハサミの音が聞こえると思った。キャベツの千切りに似た、シャキツという音だ。しかし、予想の斜め上というか予想という枠を越えた。金属と金属がぶつかる音が聞こえたのだ。これはこれで多少小気味はいいな、とかそれは問題ではない。

ハサミが髪に弾かれたのだ。

「なんじゃこりゃあ！」

『おおつ！　ナイス前髪だね。ファインプレー』

声と共に拍手が聞こえる。どうやら声だけが聞こえるわけではないようだ。…こんな状況を分析した時点で半分受け入れたよ  
うなものか。いや、すでに3分の2は受け入れてるかもしれない。

「…はあつ、諦めた。とりあえず説明が欲しいんだが？」

全て受け入れてたようだ。まさかこんな台詞が出ようとは。まあ、自分で言ったんだが。

『説明？　うーん…？　説明？』

「説明だ」

『えつとね…外界旅行？』

「へー。わざわざ遠い所からいらっしやいました。ぶぶ漬け食って  
くか？」

『ぶぶ漬け？　うん、欲しい！』

どうやらこの世界…は大きくしすぎか。日本…も微妙に大きいか  
もしれない。京都での常識が通じないとは。ただ、これほどまで位  
置が特定されると常識かどうかがよくわからない。ただ、今直面し  
ている問題はそんなことではないことは明白である。

『ねえ、ぶぶ漬けはー？』

「やるかつ！　ていうかどうやって渡すんだよ？」

『気合い』

「お前はアマレス出身か？」

『アマレス?』

「あー、アマレスっていうのはだな…ってそんなことじゃねえんだよ！　なんでお前が俺の前髪限定に生息地を頒布なさってるんだよ！」

もはや敬語やらなんやらがごちゃまぜである。

『それを説明するの…?　長いよ?』

「長くてもいいから。頼むから状況を理解させてくれ」

『しょうがないな…。じゃあまず前髪限定頒布理論の説明から始めるよ』

前髪限定頒布理論。なんともそれっぽく長いんだろうか。長いのはこの名前、とかいうオチだけは勘弁してほしい。

『そもそもこの世界に存在している知的生命体の前髪、爪というのは永遠に成長を続ける。その前髪や爪を別の生物、と仮定するならば知的生命体の体に共生することが可能である』

「途中から口調変わったよな？　後ろからページをめくるような音も聞こえるし」

『なんの話かな?』

「とぼけるのはいいけど…って待てよ。仮定する?」

『うん、仮定』

「じゃあなにか？　裏付ける理由もなしに仮定のみか?」

『でも君がもし何かの拍子に簡単に空を飛ぶ方法を見つけたら何かしらの力が働いている。問題は過程ではなく結果である…結果なの!』

「口調とかどうでもいいから。つまりはお前にも分からねえんだな?」

『うん、そういうこと。ちょっとした外泊施設みたいな感覚?　らしいよ?』

なぜ伝聞口調。いや口調はどうでもいいんだ。

「…とにかく、お前はどうしたいんだ?」

『別に何も?』

「お前は目的も無しに旅行をするのか？ 放浪癖でもあるのか？」

『失礼な。これでもれっきとした理由くらいはあるのです』

「へー、それは？」

『実は学校の課題をやりたくなくて逃げ出し…』

「帰れ」

『なんで!?!』

「いや、本当にくだらない理由で迷惑かけられてもな…」

『くだらない!?! 私の課題がくだらない!?!』

「課題はくだらなくねえよ！ くだらないのお前だ！」

『こつちはお金を払って来てるんだよ！ どうせなら楽しいことしてから帰るよ！ むしろ帰りたくないよ!』

そりゃ課題があるからな…。

「もういい。とにかく1つ聞きたいんだが…なぜ前髪が白に？」

『それが私のイメージカラー…というか私の髪の色だから。やっぱり人の体に入るからには自分の色にしないと』

「そついうもんなのか…?」

『まあ、ぶつちやけ個人の自由』

「戻せ」

『え、もしかして白が嫌い?』

「ちげえよ。髪が染まつてるのが嫌なんだ」

『でも私が消えるまではその色だから。これは変えられません』

「はあ…つまりこれはどうしようもないんだな？」

『そつ』

「ただし、お前が帰る以外は」

『う、うん』

「帰れよ」

『嫌』

「実はな？ 俺は帰宅部なんだ。つまりお前を帰宅させる義務も当然含まれている。よつて帰れ」

『嘘だね。顔がいびつ』

そうかそうか。嘘か。顔がいびつだから。

「納得出来るかっ!」

『さつきから興奮してない? 少しは落ち着いたほうがいいと思う』  
『全部てめえのせいだ!』

.....

返事が来ない。どうにも長い間。言葉が行き場を失って漂ってるみたいに。

ふと部屋の戸がノックされる。ノック二回とはこの部屋はトイレではないぞ?

「ど、怒鳴っていたけどなにかあったか?」

ああ、親父。なにかあったさ。俺の前髪が別の世界の住人に乗っ取られた、なんて言えるはずもなく。

「な、なんでもない。ちよつと電話がヒートアップしただけだから」  
「本当か? それならいいが、つとそうだ...」

『この長い間はとうだった? ちよつとびっくりした?』  
「うるせえな!」

「すまん、そんなつもりはなかったんだ。だが年寄りには早く死ねばいいなんて言わなくてもいいじゃないか」

『君のお父さんなんかおかしくない?』

「...やつぱりそうか? 別の世界から見てもおかしいか」

「いいよ。お父さんは保険金が満額で下りる時の間には死ぬように努力するから...」

ドアの向こうですすり泣きながら歩いていく親父が容易に想像できた。というのもこれがいつものやりとりであるからに他ならない。

『というわけで』

「どついうわけか説明ほしいがな」

『とりあえずは』

「帰れ」

『君の前髪に居候させてもらいまーす』

「まーす。じゃねえ! 全力でおことわりするわ! 帰れよ! 全

力で帰れよ！」

『まあまあ、いいこともあるかもよ？ ムフフな展開とか。…とか』  
とかを意味あり気に使うな。どう頑張っても、とかには深い意味はないだろうよ。

『信じてない？ じゃあ…何か願いごと言ってみて』

『帰れ』

『以外』

『ぶぶ漬け食ってけ』

『それは頂くけども、今は願いごとが先』

『しまった…先のことを一切反省してない自分が今ここにつ…』

『あの、お願い、ごと、をつ！』

『仕方ねえな…じゃあ…。焼き肉食いたい』

『お、ヤキニク？ ヤキニクってあれだよな。動物の体を焼いて食べるやつ。こつちに来たら食べたいと思ったやつ！ いいよ、叶えてしんぜよう！』

急にテンション上がりやがった。なんかうつとうしい。

『じゃあ焼き肉って早口で出来るだけ言ってみて』

『お、おう…焼き肉焼き肉焼き肉焼き肉ヤキニクヤキニクヤキニクヤキニク』

『ははっ噛んだ！ ヤキニクだって！ じゃあ次はヤキニクを逆から読んで？』

『ヤキニク？ えっと…キニ…ユって発音出来ねえ。キニユキヤ？』

『じゃあそろそろ準備を始めるよ？』

『そろそろ準備って…今のは？』

『今のは面白かったよ？』

…っ！ 目の前にいたら殴ってました。間違いない。

『ま、もともと準備は出来てるんだけどね』

『もともと？ もう出来るのか？』

『うん、ていうのもこの前髪を白く染めるのもそういう理由なんだ』

よ。じゃあ始めよ？ 君と私が同じことを本気で思えば願いは叶うから」

「焼き肉食いたってか？」

『もちろん。じゃあせーので行くよ？ せーの』

再びなる部屋の戸。次は3回。何とも統一感がないものである。

「息子よ、焼き肉食いに行くか？」

「まじか…」

『ふっふーん。すごいでしょ！』

本当になるとは思わなかった。焼き肉なんて半年ぶりか？

「なあ…」

『なに？』

「少しの間なら前髪せうに居てもいいぞ？」

『ふふっ。毎度ありー』

後ろから笑い声がしている。その声はやはり夢で聞いたのと同じ、どこか心地よい声。声の主が思っていたものとは違った性格をしてはいたが、それなりに楽しいやつだとは思う。これなら一緒にいてもいいかなと思える。

ただ1つ気になったのは

「お前って飯はどうやって食べるんだ？」

『あ』

ものすごい馬鹿なやつなのかもしれない。

結局のところ五感を共有しているらしく、実際その時になると味も食感も満腹感も感じられたらしい。

焼き肉も食べて一件落着といきたかった。…いきたかった。しかし、差し迫った問題が存在する。

「前髪どうしよう…」

『帽子でも被れば？』

「学校には持ってけない。染めようにも染まらないし…」

『白い髪が見つからないようにって願いごとしてみる？』

「出来るのか？」

『うん！ 多分』

「多分が余分だ！」

『微分積分』

「頭が痛いっ…て、遊んでる場合じゃない」

『ただ、とこの昔にやってるんだな、これが』

「は？」

『気づかないの？ 普通息子の髪が染まってたら親はビックリするでしょ？』

確かに…なにも聞かれなかった。

『つまり君は既に見つかからないようになってるっ！ はず』

もうあえて言うまい。

だが最後に一回だけ。こいつバカだろ。

「学校ではバレてたぞ？」

『だってそのとき力使えなかったもん』

「便利だな…おい」

特に性格が、だ。

『でしょ！ この能力レアなんだよ？ もうスーパーウルトラギガ

ントレア！』

意味がダブリ過ぎだ。やはりバカだと明言しよう。最後の一回は取り消し決定。

「お前バカだろ」

『え』

ていうか課題から逃げた時点でバカだな。しまった気づかなかつた。バカは俺か？

『あの…ね？ やっぱバカとか言っちゃダメだと思います。先生も言ってたよ？』

「そうか。その先生は課題をやれとは言わなかったのかよ」

『言わないわけないでしょ？』

「当たり前みたいに言うんじゃないか！」

『いいじゃない』

なにが。

もうダメだ。疲れた。コイツと話をしていると埒が明かない。ここは1つ眠るしかない。薄れていく意識の中、綺麗な声が子守歌となつた。

キキキ

しかし、逃げ切れなかった。夢の中、それは初めて出会った場所と同じ。つまりそこに行けば会える、むしろ会えてしまうわけだ。

「ヤッホー！ やつとしっかり会えたね。君の顔も初めて見るよ」  
「こつちも初めてだが…」

逃げ出したい。とにかくここから逃げ出したい。怖い。女だというのが怖い。その震えは彼女にも伝わったらしく

「だ、大丈夫？」

駆け寄ってきた。

「い、いやああああああああああつつつつつつつつつ」

「え、なに？ 逃げないですよ！ ちよつと！」  
後ろから聞こえる声が少しずつ遠ざかっていく。完全に聞こえなくなつたところで振り返る。

「女…か」

今考えてみると女が俺の中に住んでいるというのは怖ろしいことである。

なんて思っていると体に違和感。縄。縄文土器はこうして作ると言わんばかりの縄。体に巻き付いている縄。いや、むしろ罨。なんて言ってる場合じゃないっ！

「ふっふーん。捕まえた！ なんで逃げるの？ 考えてみたらまだ名前も聞いてないし」

「よよよ、寄るなっ」

「寄るなつて…まあいいや。じゃあ名前。名前を教えてよ」

「初！ 城野初だ！ 早く離れてくれっ」

「初…ね。私はデイ・シルバー・レシフェ。由緒正しきシルバー家の血統よ！」

シルバー家が何か知らない奴に言ったところで意味がなくなるか？

「基本はレシフェね。例外はレシたん以外認めません！」

「分かった、分かったからそのまま千歩くらい下がってくれ」

「しょうがないな…って千歩？」

「万歩でも構わない」

「増やしたっ！」

「早く下がれよ。億歩は下がってくれよ」

「歩き疲れるよ！」

いや、そこじゃねえだろ。疲れるとかじゃねえと思うんだよ。

「全く…じゃあ今日はここらで失礼しますよーだ。お休み、初」

「あ、ああ、レシたんもお休み」

広がっていた世界はゆっくりと閉じられていく。

キキキ

みんながご存知の通り、人間という生き物は2種類に分類されている。それはもちろん男性と女性の2種類。時にはその間のようなものもあるが、それでも生物学上ではどちらかに分類される。

そして俺は生物学上での女性が苦手…というよりアレルギー反応のようなものだ。ならそれはどこまでが範囲内なのだろうか。例えば、顔が男性そのものの女性がいたら俺はどんな反応をするのか。答えは拒絶だ。これは既に検証済みだ。理央の友達で一度試されたが俺はその日から一週間左手が痺れていた。

ただ、もし、だ。この逆パターンはどうだろうか。女性の顔を持つ男性。

これはずっと気になっていたことだ。自分の女性恐怖症を知るため。そしていずれ克服出来るか知るために。

しかしながらそんな男性というのは周りにいなかった。いなかった。…いなかった。

目の前で倒れている女性…というよりは女子。長い髪を左右で縛

り上げているのがよく似合うような子。ただ問題なのはその子の上に俺が覆い被さっていること。そして飛び込んだ先がその子の太ももの付け根と付け根の間。いわゆるところの股間。そんなところに突っ込んだのだ。俺の左手は痺れを越えて痙攣を始めていたがそれは問題ではない。もはやどうしてこうなったかというよりどうしたら抜け出せるのか。いや、そんなことじゃない。今まさにだ。俺の顔に当たっているモノ。それは男にしたら大切なモノに当てはまる。目の前にいるのは可愛らしい少女。顔に当たるのは男の大切なモノ。違和感：というより矛盾。

先ほどから前髪の住人が叫んでいるが、一切聞こえない。

よし、どころ。この場を收拾しよう。とりあえず上体を起こし、少女に声をかける。

「あの、大丈夫ですか？」

俺の言葉は間違っ てなかった。一字一句の乱れもなかった。

「放課後に体育館の裏に來い」

あれ？　なんか不良に突っかかれた時と似たような反応。しかも大丈夫かどうか答ええない。日本語が苦手なのかなー？　とか思ったら怒られるのだろうか。

なんて思っているときに少女はいなくなっていた。

「…なんだったんだ」

顔に残る感触。あれはまさに…あれだよな。

『無視をするなコラー！』

「あ？　学校で話しかけるなよ。独り言してるみたいじゃねえか」

『うるさいな！。で、体育館の裏に行くの？』

「行くわけないだろ。わざわざ女子に会いにくわけがない」

『それってなんなの？』

おっと、なんだらな。ていうか説明してなかったな。

「実はな…」

と階段の隅でブツブツ言ってる俺は他人からどのような目で見られているのだろうか。すれ違う人達が死んだ魚のような目で見てく

るのは気のせいであってほしい。

『…つまり君は女性恐怖症なんだ。よし、おねーさんが治してあげよう』

「治せるのかっ！」

今通りかかった女子生徒がビククリして止まってしまい、悲鳴をあげてしまった。…大丈夫か俺の世間体。

『いや、分かんない』

「なにこのハイリスクノーリターンは」

『まあまあ、私の能力の百分の一の奇跡にかかれば治る…かも』  
「曖昧だな…」

てか百分の一？ 確率にして1パーセントですか？

「初…大丈夫？」

「あんまりよくない…って理央？」

「友達が拳動不審な初を見たっていうから何かあったんじゃないか  
と思ってる」

「いや何もな…」

さっきの事故が頭をよぎる。

「あれ、あったか？」

「どっちなのよ…」

「まあ問題ないから。そっだ次の授業って英語だよな？ 宿題見せ

…

「ません。自分でやりなさいよ」

「だってよー」

『うんうん、気持ちは分かるよ』

「クラスから冷やかされる身にもなってよ…」

だぶって話すなよ。どっちも聞き取れねー。

「ごめん、今なんて言った？ 耳の調子が悪くてよ」

『だから気持ちは分かるって』

「何にもないわよ！」

またダブった。ややこしいなこの前髪の住人。直接頭に響くから

ほとんどかき消されてしまう。…っばい。

目の前に投げられる英語のプリント。

「お、準備いいじゃん」

「うるさい！ 馬鹿ー！」

馬鹿ってなんだよ、馬鹿って。馬でも鹿でもないんだがな。

とりあえずのところは理央から受け取ったプリントの解答を写すことに専念しなければ。受け取っただけに駄目でしたでは済まない。さっさと教室に入って作業を始める。

朝のホームルーム。通称さっちゃんタイムが始まるまで残り5分。ここでさっちゃんタイムについて触れたいことこの上ないのだが問題発生だ。前髪が異常なまでにうるさいとかではない。微妙にうるさいのは確かだけど。とにかく目先の問題をどうにかせねば。

腹が痛い。

耐え難い。耐え難いほど腹が痛い。トイレに行けばいいのだがさっちゃんタイムに遅れるわけにはいかない。かといってこの状況でさっちゃんタイムを乗り切れるかどうかというのはいささか不安が残る。

結果。

俺はトイレの便座にお世話になっている。

至福の一時。

しかし、このあと来るだろうさっちゃんのお仕置き。さっちゃんタイムにいないというのはいかなる理由であろうと許されない。

そう、この一時は死に向く前の最後の快樂なのだ。

そんな大業なことをぼやきつつ大分楽になった腹をさすりながら教室に帰る。

さっちゃんタイムは既に始まっているのは分かっている。

目の前が教室なのも分かっている。

ただ、さっちゃんタイムがいつも以上に騒がしい。なんていうかさっちゃんが酒瓶一本（空）を持ってきた時と同じレベルで騒がしい。

腹の調子も良くなり、俺自身に余裕が出てきたところでさっちゃんタイムについて触れたいと思う。ていうかもう教室の中の騒ぎっぷりが尋常じゃなくなったので俺が見直したい。

ぶっちゃけて言えば我がクラスの担任である佐伯咲さえき さくの時間だ。ちなみにサクツと行こうとか言つと頭が有り得ない方向に曲げられる。詳しく言ってもさっちゃんの時間としか言いようがない。

よし、見直す必要が一切見当たらねえ。

むしろこの騒ぎがなにか尚更分からなくなった。

仕方なく俺は安全策をとることにした。ちなみにさっちゃんの前で安全策なんて言つたら非安全咲が誕生する。…と思う。

とにかく安全策だ。騒ぎに隠れて教室の後ろから入る作戦だ。

扉をゆっくりと開いていく。バレないように、ゆっくり、と、だ。

「あーっ！」

バレた。

この騒ぎが俺の発見の一声で静まり返った。

え、騒ぎの原因は俺か？

しかして、よくよく見れば教壇の前にして、さっちゃんの横に立っているのは朝の彼女。違和感の彼女だった。

教壇から俺に向かつて歩いてくる彼女。ふと目に入って来る黒板にかかれた二葉雄虎ふたば ゆうこの文字。

「えつと二葉…さん？」

「はい、二葉です」

向かい合つたまま動き出さない2人。端から見ればドラマのワンシーンのように見えないこともない。夕暮れの教室なら尚良かったらう。

しかし、現実を見れば俺は近づいて来た女子にびびって足が動かないだけ。蛇に睨まれた蛙そのものということだ。

教室に流れる長い沈黙。誰もが状況を理解を出来ずに言葉を発せなくなっていた。

そして目の前の二葉雄虎がついに口を開いた。

「朝：この人に襲われました…」

The 爆弾発言。

とんでもねえ爆弾を用意してやがった。しかも核爆弾クラス。クラスからの視線が集中する。女子からは嫌悪の眼差し。男子からは嫉妬の眼差し。…のような気がする。

「いや、違うって…あ、朝？」

朝のことをプレイバック。二葉雄虎の股間に頭を突っ込んだ覚えが。それを襲われたと解釈しないこともない。

しかし、1つだけ気になることがある。

俺が突っ込んだ股間にあったアレ。しかし目の前にいるのは紛れもない女の子。今こうしてゆっくり見ると美少女と呼ばれるカテゴリーに入るくらいに可愛い。だがアレ。アレを確認しない限りは分からない。

次にとった俺の行動。

二葉雄虎の胸に手を当てる。  
股を弄る。

の二つ。

明らかに胸はない。ぺったんこだ。そしてやはりアレ。

確信した。こいつはおと…

「ふっ飛べ変態！」

考察を完了する前に俺の視界はさっちゃんの手で消えていた。

目を覚ますとそこには一面のお花畑。白や黄の蝶がひらひら舞っている。お花畑の向こう側で死んだ婆ちゃんが…

「って覚めてねえ！」

危うく永眠を迎えるかと思った。

今度こそ目を覚ますと保健室にいた。

「えっと？」

自分の中で整理が追いついてない。整理が出来てないからか？横になっっている自分の横で寝ている二葉雄虎がいるのがおかしいのはそのせいか？これは実は当たり前だったりしたりしないか？いや、しねえ

よ。

頭の中のことにはツッコミを入れると落ち着いてきた。そして思い出す。教室で起きたこと。

二葉雄虎は男であるということ。

そう思うともう一度確認したい。目の前には横になっている二葉雄虎。これはもう確かめると神様の思し召しかつてくらしいの状況。

右手をそつと動かしていく。

しかしその右手は行動に出る前にホールドされる。

「なにをしているの？」

「えつと…確認？」

「なんの？」

「それは…」

男か女です。なんて言ったら殺られる。そういう目をしている。

彼女の目に映る俺はとて震えているし。

「私か女の子かどうか？」

女の子かどうか。それにはなにか笑える要素がある。男の子かどうかなら自分が男だと認めている。しかし女の子かどうかと言うと自分が本当に女の子みたい…？

「女の子…？」

気付いた。目の前にいるのは姿のみは女の子。しかし、俺は震えもしなければ痺れもしない。いや、恐怖で怯えてはいたが。

結論を言えば女性恐怖症が反応しない。つまりこいつは紛れもなく男ということだ。

「お前…男か」

彼女が震える。

『死ぬがいい…』

『消えちゃえば？』

頭に直接響いてくるような声。ゆらゆらと不自然に揺れながら持ち上がるツインテール。

直接響く声と髪の毛。

この二つのワードには引っかけがあるものがあった。ありすぎた。  
「なんとかしろよ居候！」

……。

「はっ、読んだ？」

「読んでねえよ。呼んだんだ。なんでこの場面で寝ぼけてるんだよ」

「まさか…貴様っ」

「もしかしたら君も？」

「なら殺つても大丈夫」

右のツインテールがこちらに伸び、体に巻き付く。

「ま、待ってくれ。話し合えば…」

「無理だつて、諦めれば？」

「居候！本当になんとかしろよ！」

「え、だって私の力ただの運任せだよ？」

「いいから！」

「ええい、どうにでもなれ！」

奇跡は…起こった。

ただしミラクルはハプニングでしかなかった。保健室のベッドのスプリングが悪くなっていたせいか体が急に揺らいだ、と思ったらデジャヴ。今日の朝と同じ状況になっていた。

「ええつと…大丈夫か？」

「そ、そこで喋るなっ！」

「おちこぼれなのにね」

「こんな時だけ役に立つらしいな。我は興を削がれた」

「あなたたちも喋らないで！」

じとつ、という効果音が聞こえてくるんだが気のせいかな？ いや、明らかに目の前の人物から放たれているのは間違いない。そうか、とりあえず俺は立ち上がったほうがいいんだな？ とにかく早く立ち上がったほうがいいんだな？

と立ち上がるや否びンタが飛んできた。飛んできたと言っても決してロケットビンタではないことを明言しておこう。

「とにかく聞いて」

「は、はい」

「私は女の子。おーけー？」

「いや、男だろ」

保健室に響く乾いた良い音。ビンタ2発目。

「私は女の子。おーけー？」

やりなおすのかよ！

「それでもお…」

パンっパンっ！

手の平、甲と往復。今の俺の発言の先が女の子だったらどうするんだ。男と言おうとはしていたが。

「私は女の子。おーけー？」

「だいたいなんで女の子でいなきゃいけないんだよ」

そこである。こいつがもし男だったとしてなにが問題があると言うのだ。

「本当に私は女の子なの。な、なんなら触ってみる？」

「いや…触ったしな…」

「何かの間違いかも shouldn't でしょう！ ほら！ 触りなさい！」

「今触って同じだと思っただが…」

そう言いながら恐る恐る彼女？ の股に手を差し伸べる。

「って、やっぱり男じゃねえか！ なんの嫌がらせだ！」

「な、なんで！ トリフ！ 身体変化は！？」

『興を削がれたと言っただである』

「なっ…！ この厨二病末期患者のくせに！」

『まあ、いいんじゃない？ いろいろと協力してもらえば？』

「オトフルまで！」

「なあ…居候よ…。助かったのか？」

『うん…そうみたい』

こうして一先ず命は助かったらしい。ただ二葉雄虎とその髪の毛の住人との口げんか…というよりは彼女の方の一方通行の言葉は未

だに終わりそうにない。

「…もういいか？」

いつしか二葉雄虎は満身創痍な姿で息を切らせていた。

「ま、纏まった…。あなた！」

「はい？」

「名を名乗れ！」

「ああ…初だ」

「よし、初。あなたは今日から…いえ、今から私の奴隷に決定します。私の為に誠心誠意尽くさない」

「断る」

「えっ!？」

「え」

驚かれたことに驚ろいたわ。なんでその意見が通ると思うんだ。脳の一部がとろけてるんじゃないか？

「な、なんで断るの？ 断るなら死ぬのに…」

「今聞いたよ！ 死ぬの今聞いたよ！ なんでお前の頭の中だけで全部が完了形になってんだよ！」

「仕方がないか。奴隷になるか死ぬか選んでいいわ」

「未然形でも充分困った！」

「冗談抜きで殺すわよ？」

二葉雄虎が拳を突き出すと俺の後ろで轟音が響いた。恐る恐る後ろを見ると保健室のドアに穴が開いている。

へえ、なかなか凄い特技だな！。

「って感心出来るかつ。どこの殺人拳だよ。あれか？ 世紀末覇者をめぐる抗争に勝つために身につけたのか？」

「本当にやるわよ」

「ま、まあ、待て。1つだけ聞かせてくれよ」

「発言は許す」

「そ、そうか。で、聞きたいことだが、なんでお前は女の格好をしているんだ？」

「何を言ってるの？ 私は女よ」

まさかその設定をまだ貫き通すとは。まさに漢。

そう思った瞬間、頬の横に何か感触があった。さっきの拳が掠めたのだ。

「い、いや、どうして飛んできたのかなー？」

「心の中でろくでもないことを考えていた」

「って読めるのかっ!？」

「ほらやっぱり」

しまった。

「よりによつて私が女じゃないですって？ ふざけないでよね」

「うわぁ…こいつ痛いやつだ…」

「本当よ!」

「なあ、もうバレてんだから強がる必要はないだろ」

「……………」

少し考えるように俯く。

正直な話、俺自身こいつが男か女かはどうでもいい。ただ今こうして禁断症状が出ない。そして目の前には見た目は女の子がいるのだ。ある意味これは好機である。この調子で一緒に過ごすことが出来たらこの嫌なトラウマを解消出来るかもしれない。そう思うとこいつがなんであるかと関係ない。

「分かった。話す。長くなるから…しっかり聞いて」

「ああ、聞くよ。全部聞いてやる」

「そう、あれは3年前の今頃。急に髪の毛に2人の住人が住み着いた。その住人達がいる限り私の髪の毛は切ることが出来なくなっていた。仕方なく左右の髪を放っておくと伸びていつしか縛らないと大変なことになる量になっていた」

まあ、この時点では俺にも関係ない話ではない。なにせ俺の前髪にも住人がいるのだから。

「そして夏休みが開けた時、私の容姿はまるで女の子みたいになっていたの。元々顔立ちが女の子よりだったせいか、髪が伸びるとそ

れは女の子にしか見えなかった。それから周りから飛んでくる野次罵倒。いつしか女男と言われて虐められていたの。だから私は決めた。中途半端だから虐められる。ならばなりきってみせよう、って

「それがお前の女である理由か？」

「そうよ」

「くだらないな、そんな悩み」

「くだらないとはなによ！　今まで必死に悩んで、苦勞してきたんだから！」

「俺からしたらお前が男でも問題ない」

「え……」

一瞬雄虎の顔が緩む。

「むしろ女であることが問題だ」

「は……？」

緩んだ顔は一気に険しいものになっていた。

「女性恐怖症の俺からすればお前が女みたいな男であるほうが都合！　男相手にまるで女子と話してるかのように感じる！　これはすでに奇跡！」

そこまで言った所で腹部に果てしない痛みが襲った。二葉雄虎が拳を前に突き出していた。

だんだんと薄れていく意識。掠れていく二葉雄虎の姿。

「なんで一瞬喜んだりなんか……。でも関係ない……。か。ふふっ」

最後の言葉は聞き取れなかったが記憶の中で最後の二葉雄虎の姿はまさしく美少女と呼ばれるものだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9875x/>

---

髪が白く染まる頃

2011年10月28日09時15分発行